

卷頭言

青井陽治さんからの 「宿題」

楠原 拓 (chari-T)

NARAHARA, Taku

9月に演出家・翻訳家で、劇作家協会の会員でもあった青井陽治さんが亡くなられた。体調不良と伺っていたので気にかけてはいたのだが、まさかそこまでの症状とは思ってもせず……突然の訃報……。

青井さんとは、私が担当する戯曲セミナーを通じて親しくさせて頂いていた。うちの劇団「チャリティ企画」の公演にも足を運んでくださり、それを気に入られたようで、青井さんのミュージカル講座では私の作品を「ストリートプレイ作品をミュージカル化する」という課題の題材戯曲にしてくださいだったりもした。「これをどうミュージカルにするんだ？」と少々困惑もしたのだが、しかしながら大変光栄なことであった。

戯曲セミナーでは毎年非常に興味深い話を聞かせていただいた。中でも、長年ミュージカルに携わってこられたことから、音楽やリズムに対して言及されることが多かった。

「〈曲〉という文字がついているように、戯曲は文字に書いた楽譜である」

「演劇はいわば〈音楽〉なので、ストリートプレイの劇作家でもミュージカルが書ける劇作家であるべき。演劇の才能も文学の才能もなくともいいが、音楽の才能だけはなくてはいけない」
「ある一定の時間の中で何が描けるかというのが戯曲なので、体内時計を敏感にしておく訓練は大事」（筆者がまとめた戯曲セミナーの講義記録より）

また時には、日本の創作現場に対して手厳しく問題提起されることもあった。

「3日前に台本が上がり、役者が覚えてたのセリフを披露するだけで賞がとれてしまうような日本と比べて、ブロードウェイでは費やされる時間が全然違う。1本の作品をつくるまでにだいたい8年かかる」

〆切りギリギリで書き上げることがほとんどの私としても、ただただ反省させられるばかりであった。豊かなご経験とそれに基づく幅広いご見識をお持ちだった大先輩。まだまだいろいろ教えを請いたかったのだが、大変残念である。

最後に、青井さんの講義の中からもっとも印象深い一節を。

「日本のミュージカルは現代口語不定〈叙情詩〉ばかりで、現代口語不定〈叙事詩〉は生まれていない。それを創り出さなければいけない」

青井さんから日本の劇作家に託された「宿題」のように感じる。

青井陽治さん、本当にお疲れ様でした。安らかにお眠りください。